



情報通信技術 (ICT) でより知的な実装を

安田 浩*

あけましておめでとうございます。激動の2011年が去り、平穏な2012年になることを、皆様祈念されたことと思います。新しい年明けにあたって、東日本大震災で犠牲になられた方々に改めて心からの哀悼の意を表し、被災された方々・地域の1日も早い復興を祈念いたしますとともに、本年が会員の皆様にとりまして、幸多き1年となることをお祈り申し上げます。

3.11を開始時点とする激動の影響は、まず、「ICTが役にたたない」という大合唱から始まりました。震災とICTの係わりに関する会合やシンポジウムが数多く開かれ、私が会長を務めます電子情報通信学会も昨年10月CEATECで、「災害を乗り越えて：安心・安全でスマートなICT社会構築へ」と題する大掛かりなシンポジウムを主催し、各界の第一人者による検証を世に問うて、それなりの責務を果たせたかと胸をなでおろしているところです。

このシンポジウムを通して、人はもちろんのこと、海も山も日常使用している器具も配線も基盤もデザインも瓦礫もそして地球全体も、それぞれ発信をしていること、そして、それらの発信を真摯に受け止める姿勢・体制ならびに技術が、すぐに使える状態に整備されていなかったことが、多くの悲劇を生み出してしまったことを、私たちは学びました。

被災地復興の遅れに対する怒りの声、種々の不具合を検証するためのセンサの不足から始まって、20世紀後半から顕著になりだした、絶滅種の泣き声、日ごろ使用している種々の製品が正しく使われないために発する不満の声、宇宙船地球号のうめき声など、目に見・耳を傾け・体感するべき発信が山のようにあることに、皆様もお気づきのことと思います。

最先端ICT技術を使えば、これらの発信をとらえ、処理し、そして対処することは可能であり、配線や基盤、日常使用する器具、そして森羅万象が発する「声なき声」ととらえ、「見えない事象」を可視化し、過去からのメッセージを教訓として、未来への対処を行えば、真の安心・安全そして美を与えるエレクトロニクス実装は完成するのではないのでしょうか。

20世紀までの「ものづくり」の積み重ねの中で、われわれはすべての発信をとらえるための、基礎的ICT技術を培ってまいりました。しかし、発信をすべてとらえたとしても、それに加えて、社会制度や人間心理面も加味した「知力」を結集して、発信を活用しなければならない局面にきていると考えています。

エレクトロニクス実装は、その完成度を高めることにより、安心・安全・美しさを人に感じさせ、心を豊かにしてくれます。エレクトロニクス実装のすべての要素からの発信を、ICTでとらえ、より知的な実装を実現していただければ、さらに心豊かな社会を築くことができると確信しております。

エレクトロニクス実装とICTをより強く融合させることに、エレクトロニクス実装学会会員の皆様と手を携えて努力していきたいと思っています。新しい年がその大きな一歩となることを期待しております。